大分県立芸術文化短期大学研究紀要　第33巻（1995年）

『ノーサンガー寺院』
「途方もない」女主人公 ── キャサリン・モーランド

Northanger Abbey : 'Extraordinary' Heroine ── Catherine Morland

入　野　賀和子
Kawako Irino

> キャサリンは全身喜びそのものだった。彼等がその町の美しく魅力的な近郊へと入っていくにつれて、そして宿へと続く通りを馬車で走り抜けるとき、彼女の眼はあちらこちら、全てのものに向けられた。彼女は楽しく過ごすためにやって来たのだ、そしてもうすでに心は幸福感を味わっていた。[1]

17歳のキャサリン・モーランドが初めて両親の元を離れ、近所に住むアレン夫妻に連れられてバースへとやって来たとき、彼女の心は未知の世界への期待と幸福への予感で浮き立っていた。しかし三か月後に彼女が口にしたのは、それとは全く趣を異にするものだった。

> 喜びに満ちた期待で胸踊らせながら一日に何十回となくあちこち走り回り、心も軽く陽気で何の屈託もなく、まだ味わったことのない本物の喜びを心待ちにし、この世の邪悪さなど知ることも、またそのようなものが存在することへの懸念もなかったあの頃から三か月も経っていなかった。三か月前まではまさにこのようだった、それなのに今では何と変わり果てた姿となって戻ってきたことだろう！(234)

17歳という若さ、しかもわずか三か月という短期間の経験が言わせた言葉にしてはいささか大袈裟と言わざるを得ない。そしてこの誇張とからかいのこもった調子こそ『ノーサンガー寺院』(1818)の中に一貫して流れているものである。若い女性が初めて世間に出て世の中の華やかな面のみならず暗黒面をも知ることにより成長するという物語は、この当時の小説、とりわけ女性作家による作品の中で好んで取り上げられているものである。キャサリンがバース到着後初めて舞踏会へ出かけることを 'our heroine's entrée into life' とジェイン・オースティンが表現しているのも、明らかに先輩作家ファニー・バーニーの『エヴリーナ』(1778) を意識してのことである。そしてキャサリンは、その人生入門三か月後には「彼女ははっきりと目を開かされたのだ…耐え難いほどに我が身を恥じ、激しく泣いた」(201) とあるように、己の無知に恥じ入るのである。このキャサリンの苦悶はまた、ジェイン・オースティンのこの後の作品の女主人公エリザベス・ベネットやエマ・ウッドハウスの苦悶に通ずるものである。[2]エリザベスは「私はなんて見下げ果てたことをしたのだろう！…今こんなことに気付くなんて、恥ずかしい限りだわ…たった今まで、私は自分というものを知らなかった」[3]と苦渋の声を上げ、エマは「どうしようもない自惚れの気持ちとともに、自分は全ての人の心の中の密かな思いを知って

いると信じ込んでいた。許し難い傲慢さでみんなの運命をこの手でお膳立てしようとしていたのだ。全てのことにおいて自分が間違っていたことが分かったのだ」[4] と惨めさを味わう。

このように『ノーサンガー寺院』は、ジェイン・オースティンが大いに楽しみ敬意を払いながらも、その不自然さをからかわないではいられなかった当時の小説に対する彼女の思いと、女主人公の自己認識という彼女の作品に一貫して流れているテーマとがより粗削りな調子で、そしてその分だけより明確に読み取れる作品として大きな意味をなすと思われる。本論ではジェイン・オースティン流 'A Young Lady's Entrance into the World' とはいかなるものかという観点からこの作品を追っていってみたい。

1

作家が自分の作品の女主人公をどのような人物に設定するかということは、その作品の基調を決定するに当たってかなり大きな要素を占めている。例えば『ノーサンガー寺院』の中でも言及されている『ユードルフォーの謎』(1794) では、アン・ラドクリフは女主人公エミリーを幼くしてすでに「並外れた繊細さ、こまやかで愛情深く思いやり溢れる心」に加えて、「心の平安を保っていくには、余りにも鋭敏過ぎる感受性」の持ち主として登場させる。[5] そしてこの感受性がエミリーの美しさに気品を添え、周りの人々の心を魅了するのである。美徳と毅然とした心の気高さを教え込まれるエミリーは、絵や音楽に対しても生まれながらの才能に恵まれ、女性としてのたしなみにも際立った熟達を示す。エミリーは美貌と美徳を兼ね備えた、感受性そのものといった女主人公に仕立て上げられている。あるいはまた、ファニー・バーニーは『エヴリーナ』の序文の中で、自らの女主人公に関して「美徳、優れた理解力、豊かな感受性」を備え、しかも「人目をひくほどの美貌」の持ち主として紹介している。[6] つまりジェイン・オースティンが慣れ親しんでいた小説の女主人公たちの最大公約数的な姿は、美貌、知性、感性どれを取っても人際すぐれた存在である。少し時代は下がって、ジェイン・オースティンの作品を「注意深く柵を巡らされ、整然とした花壇や優美な花の咲く大そう手入れのゆき届いた庭園」[7] のようで人間の心の奥深く鼓動する激しく暗い情念を排除していると、その作品を高く評価しなかったシャーロット・ブロンテも、『ジェイン・エア』(1847) 創作にあたって、やはりそれまでに出版されてきた数多くの小説を念頭において、彼女なりの女主人公を生み出すことへの意欲を語っている。シャーロット・ブロンテは、女性の主人公を当然のことのように美貌の持ち主にすることの不自然さに反発し、「不器量でちっぽけな女主人公」の物語を送り出した。[8] このように作家が自らの作品の主人公を設定する場合、それまで接してきた他の作家たちの作品の踏襲であれ手厳しい批判であれ、そこにはそれらの作品に対する何らかの評価が含まれている。その意味において『ノーサンガー寺院』は、ジェイン・オースティンの小説観がかなり明確な形で読み取れる作品でもある。

「キャサリン・モーランドの少女時代を知っている人は、彼女が物語の女主人公になるように生まれついているなどとは思いもよらないことだったろう」という書き出しで始まる『ノーサンガー寺院』で、ジェイン・オースティンはキャサリンが子供の頃から器量においても才能においても取り立てて言うほどのこともない、しごく平凡な存在であることを繰り返し強調する。「教えられる前から何かを学び取ったり、理解することなど一度もなく」(37)、しかも落ち着きがなく、注意散漫で、同じことを教えられていても妹のほうが飲み込みが早いほどで、

このようなキャサリンを時にオースティンは 'stupid' と呼んでいる。自らの作品の女主人公を 'stupid' とからかえるとは、オースティンも随分思い切った主人公像を考えたものである。主人公がいつも美しい女性というのは不自然だと言ったブロンテでさえも、知的に劣る女主人公など思いも寄らぬことでジェイン・エアには並外れた観察眼、分析力、批判力を付与し、知性においてはだれにもひけをとらない人物に仕立てている。

オースティンは、キャサリンの凡庸さをかなり誇張した調子で繰り返し読者に語りかける。およそ物語の主人公としては相応しくないと言いながら、実はそれまでの小説の主人公たちへの痛烈な揶揄が含まれているのである。「なんと奇妙で訳の分からない人物なんでしょう!」(38)と言われ、およそ主人公らしからぬ平凡そのもののキャサリンはまた、凡庸であるがゆえに逆説的に「途方もない」女主人公になりうるのである。人形遊びよりも泥まみれになって戸外で遊ぶほうを好む、溌剌とした悪戯好きの少女も17歳になる頃には「そこそこ可愛い」と言われる娘になる。こうして「愛情深く、快活で率直、いかなる自惚れも気取りもない」そして「世間一般の17歳の娘と同程度に無知な」(41)キャサリンは、アレン氏の痛風治療のお供というこれまたひどくありふれた理由で世の中に乗り出して行くことになる。

バースに到着するやいなやキャサリンは社交界の華になるどころか、アレン夫妻には誰も知人がいなかったために、舞踏会で踊ることもできずに無為に一週間が過ぎる。このような状態の時にキャサリンは偶然にも踊りのパートナーとしてヘンリィ・ティルニーを紹介される。「彼はよどみなく快活に話しをした、そして彼の話し方には、彼女にはほとんどよく理解できないながら興味をかきたてる茶目っ気とひょうきんさがあった」(47)とあるように、話相手のいない寂しさを味わっていたキャサリンにとって、「美男子とは言えないまでも、まあかなりそれに近く」、また感じの良いヘンリィを無条件に受け入れる素地はすでにできていたと言える。服装のことにしか関心のない、人の良さだけが取柄のアレン夫人の話しに余りに調子良く応ずるヘンリィを、少し悪乗り気味だと思えるぐらいの分別はありながらも、感じの良さに惹かれてほとんど無条件に受け入れるこの無邪気さこそ、女主人公としてのキャサリンの際立った特徴をなすものである。

ヘンリィと共にキャサリンの人生入門に多大の影響を与えるもう一方の人物として登場するのがイザベラ・ソープである。『ノーサンガー寺院』が感傷小説及びゴシック小説へのパロディ的作品であるというのは誰しも認めるところであるが、前半のバースでのエピソードにおける非常に日常的で現実的な描写の積み重ねの中で、イザベラはオースティンのバーレスク的要素の大きい少女期における習作の中に登場する女主人公たちの特徴を最も色濃く残している人物である。ヘンリィとキャサリン、イザベラとキャサリン、この二つの関係を巡って展開していくこの作品は、オースティンの習作「恋と友情」というタイトルを連想させるのみならず、イザベラとキャサリンの出会いはローラとソファイアをも連想させるものがある。

> 三週間もの間、心からの友人というものを持てなかったので…その名に本当に値する人に出会えた時の私の天にも昇る気持ちを想像してみてください…物柔らかな気だるさがソファイアの愛らしい容貌を包み、さらに一層美しさを増しているのでした。それはまた彼女の心に関しても言えることで、全身これ感受性といった感じでした。私達はお互いの腕の中に飛び込み、終生変わらぬ友情の誓いを交わし合い、すぐさま心の奥なる秘密をともに明かし合ったのです。(9)

「兄同士が友人なのだから、もうすでにお互いにお友達も同然だわ」と熱烈な調子で話しかけられたキャサリンは、ヘンリィの場合と同様イザベラを無条件に受け入れる。誇張癖や過度の感情吐露、熱烈な愛情表現など読者には浅薄な感傷小説の女主人公のパロディとしか思えないイザベラも、キャサリンには彼女が夢中になって読み耽った物語の女主人公そのものに写るのである。

オースティンは登場人物を導入する場合、とりわけ脇役に関しては特別な意図がない限りその人物に明確な価値判断を下して読者の印象の方向付けをする。例えばアレン夫人は「この女性と結婚したいと思うほど好きになった男性が世の中にはいるのだということにただただ驚きの念を覚える、そういう数多くいる女性のタイプの一人だった」(42－43) と、少々毒のこもった調子で登場させられる。イザベラの兄ジョン・ソープにいたっては「とりたててどうと言うこともない顔、不格好な身体付きをし、馬丁の服装でもしなければ美男ぶりが目立ち過ぎ、礼儀正しくあるべきところで気安く振舞わなければ、またくつろいだ雰囲気が許されるところで馴れ馴れしく振舞わなければ紳士然となり過ぎるのではと恐れているように見えた」(66)と、辛辣さの度合いはさらに強烈である。ところがイザベラの登場に関しては、このような作者自らが直接評価を下して読者の印象を固定化する手法は巧みに回避される。他の登場人物の口を通して間接的にのみイザベラの人物像が提示されるのである。それは、娘の器量自慢をする母親のソープ夫人の言葉であったり、イザベラの素晴らしさを熱烈に誉めそやす、彼女に想いを寄せるジェイムズ・モーランドを通してであったりする。オースティンはイザベラに対する直接的評価を下す代わりに、イザベラの言動を忠実に移し取っているかのような態度を装うことにより、一方ではキャサリンの無邪気で盲目的なイザベラへの傾倒ぶりを際立たせ、また他方読者にはイザベラが軽薄で不誠実なコケットに過ぎないことが十分伝わるような描き方をするという二重に効果的な技巧を駆使している。

キャサリンより4歳年上のイザベラは、それまでのキャサリンには無縁だった舞踏会や服装の最新情報、恋愛に関しての知識を豊富に持っているというだけで、もうすでにキャサリンより優位に立っている。そのようなイザベラをキャサリンは尊敬と感謝の念で迎え入れる。

> 「…今朝出かけたいと思っていたので、雨が降るのではと大層心配したのよ。雨がザアーッと降ってきそうだったので、胸が張り裂けそうになったのよ。」(60)

> 「…あなたがミス・アンドルーズとお知り合いだといいのに、あの方のことときっと気に入ると思うの、考えられないくらい素敵なマントをご自分で編んでいらっしゃるのよ。私には天使のように愛らしい方と思えるのだけれど、男の方たちがあの方のことを熱烈に賛美しないものだから私とても腹を立てたの。そのことで男の方たちをものすごく叱ってさしあげたのよ。」(61)

> 「あの晩はミス·アンドルーズも一緒にお茶を飲んだのよ、あの方は濃い茶色の絹のドレスを着てらしたわ。まるで天使のようで、あなたのお兄様は絶対にあの方に恋をしたと思ったの。それを考えると一晩中一睡もできなかったわ。ああ！キャサリン、あなたのお兄様のせいで幾度眠れぬ夜を過ごしたことでしょう！あなたには私のようなおもいはさせたくないわ！自分でもひどく痩せ細ってしまったのが分かるの、でも私の不安な気持ちを一々

並べ立ててあなたを苦しめるつもりはないわ、あなたはもう十分ご覧になったわけですものね。私ったらいつも自分の気持ちをついうっかり表に出してしまうのですわ。」(132)

イザベラの不自然なまでの誇張癖、感傷癖の裏には空虚さや悪意、虚栄心、不誠実さが潜んでいるのは言うまでもないことである。しかし実際的で率直な雰囲気の中で育ち、言語は話し手の意図をそのまま表現するものでそれ以上でも以下でもないと信じ込んでいるキャサリンには、人間の虚栄心が言葉の中に虚偽や矛盾を平然と織り混ぜることができることを理解できない。様々な階級や種類の人間が群がり集まる社会の縮図のようなバースの中でキャサリンが直面するのは、言語がその本来の機能を失い空虚で欺瞞に満ちた無意味な言葉の羅列へと堕してしまっている現実社会の姿である。言い抜け、ごまかし、追従などありとあらゆる欺瞞が充満している社会なのである。「一つのことをあれほどはっきりと言いながら同時にまた別のことを意味しているなんて、なんて不可解なのでしょう!」(212) とキャサリンは当惑する。ヘンリィがキャサリンの無邪気な率直さを賞賛したとき、「私には訳の分からないような高尚な言い方などできませんもの」(142) と答えるキャサリンの言葉には無意識ではあるが痛烈な皮肉が込められている。

2

キャサリンはイザベラの影響を受けゴシック小説に熱中する。しかしキャサリンの小説への関心は彼女の無邪気さと呼応するかのように、その作品が 'horrid' であるかどうかに向けられている。『ノーサンガー寺院』ではキャサリンがイザベラ、ジョンのソープ兄妹、そしてヘンリィ、エリナーのティルニー兄妹とそれぞれゴシック小説を話題にする場面が何度か登場する。バトラーも言っているようにオースティンはこれらの会話を自らの小説論を披露するためではなく、登場人物の性格をより客観的に提示する材料として利用しているのである。[10] イザベラが「『サー・チャールズ・グランディソン』はものすごく恐いお話じゃなかったかしら、確かミス・アンドルーズは第一章も読み通せなかったそうよ」(62)と言い、すぐに話題をその晩着るドレスに転ずるとき、彼女の知識が借り物であり彼女の真の興味の対象は小説ではなく全く別にあることが知らされる。またジョンが「『ユードルフォーの謎』なんてくだらない、もし読むとすればやはりラドクリフ夫人のものに限るね、彼女の小説は十分面白いよ、読む価値があるしね。面白いし、本当らしさがあるよ」(69)と答えるとき、やはり彼の無知で独善的で浅薄な実体が明らかにされる。しかしキャサリンはこのような彼等の言動に対して曖昧なままで明確な判断を下すことはない。

キャサリンは、言語は文字通り話し手の考えをそのまま伝達しているものと単純に思い込んでしまうのと同様に、ゴシック小説に対する彼女の反応も善と悪が明確に色分けされた一元的世界と捉える極めて単純化されたものである。キャサリンがゴシック小説を夢中になって読み耽るのは、彼女にとってその世界が 'horrid' かつ波瀾万丈の展開になっているということだけでなく、善悪に二極化された分かり易い構図として捉えられるからである。キャサリンがエリナー・ティルニーに、歴史関係の書物には小説と同じ虚構的要素が入り込んでいながら、小説と異なり中に登場する英雄の演説の個所などかなり退屈で面白みに欠けると述べたとき、エリナーは歴史の書物の面白さは事実の記述と同時に、許容される範囲内で英雄の演説など著者の

想像力を駆使できるところにあり、読者は「虚構と事実をともに受け入れる」(123) 楽しさを味わうことができると語る。相手の発する言葉を吟味することなく素直に受け入れる世間知らずのキャサリンには、虚構と事実を識別しつつしかも虚構と知りつつそれを楽しむなどという芸当は未だ未経験の領域である。キャサリンが人生入門で直面するのは、まさに実人生における虚構と事実、この両者の奇々怪々なる関係であると言える。

キャサリンが話し手の言語を文字通りに受け取るということはまた、その話し手の言語に引きずられ惑わされ、話し手の正体を見誤ることになる。しかし逆に相手が発する言語がキャサリンにとって何ら意味を成さないとき、つまり共有すべき言語を有しない場合には、キャサリンも言語に惑わされることなく生来の直観と良識を発揮する。イザベラの兄であり、キャサリンの兄ジェイムズの親友でもあるジョン・ソープは、キャサリンとの出会いの時点ですでに好意的に受け入れられる要件を満たしているはずである。しかしジョンが話題にするのは常に自分の馬車や馬、競馬、狩猟に関しての自慢話であり、キャサリンが共有しあえないどころか、理解を越えるものである。兄ジェイムズがジョンを誉め上げても、また兄のジョンはキャサリンをこの世で最高の美人と言っているというキャサリンの虚栄心をくすぐるようなイザベラのお世辞にもかかわらず、キャサリンはジョンの不愉快な自己中心性を直観的に感じ取っている。このようなジョンの自己中心性は、自分たちの馬車による遠出の計画を優先させるため、すでに約束がなされていたキャサリンとティルニー兄妹の散策の計画を二度にわたって邪魔をしようとしたことでキャサリンには疑う余地のないものになる。すなわち一度目は、ティルニー兄妹が馬車で全く違う方向へ出かけるところを見かけたと虚偽の情報をキャサリンに伝えることにより、また二度目はキャサリンには先約があるからと嘘をついてティルニー兄妹に約束の延期を勝手に申し出るという不誠実そのもののジョンの行為を目の当たりにすることにより、キャサリンは兄ジェイムズやイザベラといった彼女の判断の拠となっていた「権威者」の影響下を脱して、初めて自らの判断に基づき行動するのである。キャサリンの陥るディレンマの原因がいかに些細なことであろうと、妹としての従順や友としての愛情を仄めかす兄ジェイムズやイザベラの「権威」に対して、キャサリンは初めて自らの信念と意志で抵抗するのである。彼等の不興を買うことに心痛めながらも、「私が間違っているとしても、私は正しいと信ずることをしているのですわ」(115) と言い放つキャサリンは、人生入門における自立への関門の通過を経験していると言うことができる。

キャサリンとジョンの何ら共有共感すべきものを持たない会話のちぐはぐぶりは、ジョンのキャサリンへの結婚の申し込みの場面に最も効果的に描かれている。虚栄心だけは人並み以上で、傷付くことへの恐怖も人並み以上のジョンの言葉は限りなく婉曲でしかも曖昧な表現に終始し、キャサリンの無邪気な応答をことごとく自分に都合良く解釈していく。一方キャサリンは彼の要領を得ない話の内容をほとんど理解できないままである。このような状況でありながらジョンは「結婚の申し込みをしたも同然」の気分になり、キャサリンはそのような会話が二人の間で交わされたことすら記憶していないのである。

キャサリンはジョンの言動に惑わされることなく直観的に彼の本質を見抜いているが、そのような彼に対する評価は、彼が嘘をついてまで自分たちの計画を優先させようとした具体的行為を目の当たりにすることによりさらに決定的なものとなる。ところがイザベラの場合には、キャサリンは常にイザベラの過剰なまでの友としての愛情表現に惑わされつつ引きずられていく。イザベラとキャサリンの初めての出会いの場面をキャサリンとエリナーの出会いと比べて

みればその違いは明らかである。友情をはぐくむ全段階を一気に駆け抜けて親友となるイザベラとキャサリンの熱狂ぶりに比べると、キャサリンとエリナーがお互いに親しくなっていく過程は我々読者には逆に冷淡とも写るほど慎ましやかで遅々としたものである。オースティンは感傷小説のパロディとしてのイザベラとキャサリンの友情を描くことにより、過剰な感情表現の不自然さを揶揄しつつ同時にキャサリンとエリナーとの関係を通して浮かび上がってくる現実世界の地味で何の変哲もない状況との大きな隔たりをも改めて読者に印象付けるのである。キャサリンはイザベラに全幅の信頼と愛情を寄せているがゆえに、イザベラの語る言葉を客観的に吟味することができない。「私の願いはとてもささやかなものだから、ほんのわずかな収入でも私には十分なのよ、本当に心が結ばれていれば貧しさそのものだって幸せと思えるのよ」(133) と言いながら、婚約者のジェイムズが父親から譲渡される財産が予想より少なかったことに失望をあらわにするイザベラに対してキャサリンは一瞬不信感を抱き始めることがあっても、イザベラが収入を問題にしたのはジェイムズのためを思ってのことであり、失望の真の理由は今すぐ結婚できないことにあるのだと弁解すると、キャサリンはそのようなイザベラの言葉を素直に信じようとするのである。

キャサリンはイザベラの言動に潜む矛盾に何度も遭遇しながらもイザベラへの愛情ゆえに彼女の語る言葉をそのまま受け入れようとする。折々にイザベラに疑念を持つことがあったにしても、キャサリンがイザベラの正体をはっきりと認識するのは結局は兄のジェイムズの婚約破棄を告げる手紙によってであり、キャサリン自らの発見でそのような認識に至ったというのではない。イザベラの不誠実さをはっきりと記したジェイムズからの手紙は疑う余地のない具体的証拠となりキャサリンに突きつけられる。兄ジェイムズもキャサリン同様にイザベラの言動に惑わされ、彼女の本質を見誤っていたことを思い知らされるわけである。兄ジェイムズからの手紙の後を追いかけるようにイザベラからの自己弁明と相変わらずの熱烈な友情を押しつけるような手紙がキャサリンの元に届くが、さすがのキャサリンもその手紙に現れた偽瞞性や矛盾に気付かざるを得ない。しかし優れた直観力や良識を有しながら「途方もない」ほど無邪気で疑うことを知らないキャサリンであるならば、もしイザベラからの手紙の方が先に届いていたとしたら果たしてこのように明確に彼女の本質を見抜くことができたのだろうかという疑問も読者には残るように思われるのである。

キャサリンはジョンに対しては直観的にその自己中心的な性格を見抜き嫌悪感を抱く。またイザベラの場合にはキャサリン自身の彼女に対する盲目的な愛情がイザベラの真の姿を捉えることを阻むことになる。ところがヘンリィの父親のティルニー将軍に対しては直観も愛情も関与せず、極めて意識的とも言える先入観を持つことからイザベラ以上に彼の言動は謎となり惑わされることになる。キャサリンがティルニー将軍のバースでの滞在先を訪問したときの場面は、彼女の無邪気な思い込みと困惑が大変効果的に描写されている個所でもある。

> …彼等（ティルニー兄妹）の父親の彼女に対する大層礼儀正しい振舞いにもかかわらず、彼の感謝や誘いやお世辞にもかかわらず、彼から解放された時にはほっとした気持ちになった。このことを説明しようとして彼女は困惑した。ティルニー将軍のせいなどであるはずがない。彼が申し分のないほど感じがよく親切で文句なしに魅力的な人物であることは疑う余地のないことだ、というのも彼は背が高くハンサムで、それにヘンリィの父親なのだから。彼の子供たちに元気がなかったことや、彼と一緒にいても楽しくなかったこと

の責任が彼にあるはずがない。子供たちに元気がなかったのは偶然だったかもしれないし、自分が楽しくなかったのは自分が愚かなせいに過ぎないのだ。(139)

キャサリンはティルニー将軍の愛想の良い対応に対して当然ながら喜びを感じていいはずなのだが、彼への訳の分からぬ恐怖心につきまとわれる。イザベラの場合と同様に彼の語る言葉も本心から発せられたものと思うゆえに、キャサリンの中に混乱が生ずるのである。しかもイザベラに対して抱いていたような自然な愛情や感謝の念を彼には抱くことができないために、キャサリン自身の困惑は倍加することになる。キャサリンの「彼は背が高くハンサムで、それにヘンリィの父親なのだから」という無邪気な、そして無理やりの理由付けの中には彼女のヘンリィへの盲目的な憧れの想いが込められているが、それと同時に彼女がティルニー将軍への直観的な恐怖感を感じ取っている戸惑いも伝わってくるのである。

キャサリンの人生入門に当たっての最大の試練は、オースティンが揶揄する当時の小説の筋の展開における典型的パターンであった女主人公の誘拐、虐待、監禁といった暴力的かつ異常とも言えるような外的要素からの迫害ではない。オースティンは『ノーサンガー寺院』の中で感傷小説やゴシック小説の誇張された虚構の世界と、同じく虚構の世界でありながらなんら目覚ましいところのない地味な日常生活を扱ったリアリスチックな小説が作り出す世界とを常に並置、対比させるような手法を取っている。と同時にオースティンはまた、くすんで波瀾万丈とは程遠い日常生活の中にも華々しい虚構と地味な事実がない混ぜになり虚虚実実の駆け引きが展開されていることをも読者に提示している。キャサリンの試練は、このような日常世界における虚構と事実の見極めという、極めて現実的な試練なのである。エリナーが語る「虚構と事実をともに受け入れる楽しさ」、虚構と事実をしっかりと識別しながらしかも虚構と承知しつつそれを享受する楽しさを味わうには、それを味わう側の人間の洞察力や理解力のみならず想像力や空想力をも必要とされる。オースティンがキャサリンを通して描くのは、そのような想像力を的外れに駆使することによって引き起こされる悲喜劇であり、決して想像力や作り事の虚構の世界を否定するものではない。

キャサリンの困惑は小説を読むように現実世界をも読み取ろうとするところから生ずるものである。彼女はゴシック小説にのめり込むが、自らをゴシック小説の女主人公と同一化させて物語の世界と現実世界との見分けがつかなくなってしまうほど愚かな人物として描かれてはいない。

「…ねえキャサリン、午前中ずっと何をなさってたの、『ユードルフォー』にかかりっきりだったの？」

「ええ、目が覚めてからずっと読んでいるの、黒いベールのところまできているのよ。」

「まあ、そうなの、なんて素敵なんでしょう！黒いベールのむこうに何があるか、絶対に言わないようにするわね！ものすごく知りたいでしょうね。」

「ええ、とっても、何なのかしら？でも、教えないで、絶対に言わないでね。骸骨に違いないわ。きっとローレンティナの骸骨よ。私、本が大好きよ！一生本を読んで過ごしていたいわ。もしあなたに会うのでなかったら、どんなことがあっても途中で止めたりしなかったわ。」(60－61)

キャサリンは『ユードルフォー』があくまでも虚構の世界であることを十分に承知している。ただ実人生においては、想像力や空想力は目の前に展開されている個々の事実をしっかりと見据えたうえで働かすことを要求される。キャサリンがイザベラに惑わされたようにティルニー将軍の実体を見誤るのは、想像力や空想力を願望や先入観で縛り付けてしまいねじ曲げて働かせてしまうからである。

キャサリンのノーサンガー寺院探究は、彼女のティルニー将軍に対する認識に到る過程と興味深い対照を示している。「古い建築物への熱中ぶりは、ヘンリィ・ティルニーへの熱中ぶりに次ぐ」(149) ほど古い城や寺院に夢中のキャサリンが、ティルニー家の住まいであるノーサンガー寺院に招待された時から彼女の先入観はすでにノーサンガー寺院を『ユードルフォー』に登場するような古風でいわくありげな場所として作り上げている。実際のノーサンガー寺院が近代的設備を備えた快適な住まいに改造されていても、キャサリンの先入観は容易にその事実を認め得ない。それどころか逆に無理やりにいわくありげな中世の痕跡を探し出そうとする。キャサリンが大きな衣装箱、漆黒のタンスと次々に好奇心に駆られて探索する場面は、正にゴシック小説の女主人公のパロディそのもので、「どのような代償を払うことになろうとも」(169) とか、「キャサリンは頭のてっぺんからつま先まで震えた…人間にはこれ以上のものは耐えられそうにない」(175) など誇張された大時代的表現が多用されている。にもかかわらずキャサリンが衣装箱やタンスの中に実際に発見したものは、きちんと畳まれた掛けぶとんであり、洗濯物の勘定書きや蹄鉄工からの請求書だった。キャサリンの期待は見事に裏切られ、的外れな想像力が引き起こした愚行は、極めてありふれた日常生活の必需品や勘定書きといった具体的証拠を突きつけられるという苦い結果をもたらすことになる。

しかしティルニー将軍に関しては、彼の正体への謎はキャサリンにとって深まるばかりである。エリナーに対する彼の高圧的態度、エリナーが語る彼女の母親の突然の死の状況、さらにはキャサリン自身が抱く彼への恐怖心が一緒になり、彼への幻想を膨らませ遂には自分の妻を殺害もしくは監禁している極悪非道の大悪党と思い込む。キャサリンはその証拠を発見しようと彼の妻が使っていた部屋を密かに探りにいくが、彼女が目にしたものは、快適ではあるが秘密の匂いとは程遠いありふれた部屋に過ぎなかった。彼の妻の部屋に秘密があるに違いないと、キャサリンの証拠を求めての探索はまたもや的外れの結果に終わるが、今回の冒険は衣装箱の場合のように彼女の愚行を嘲笑うかのような具体的事物に遭遇するわけではなかった。キャサリンは彼女の的外れな探索の結果に失望しつつも、「将軍の罪がどんなものであれ、彼は確かに頭が働く人間なので露見するようなことをするはずがない」(196) と、あくまでも彼の残虐行為への確信を抱き続ける。

キャサリンがティルニー将軍に対する思い込みの愚かさを認識するのは、イザベラの場合と同様に今回もまた自らの発見というよりはヘンリィにその誤りをはっきりと指摘されたからである。

> 「…ねえミス・モーランド、あなたは何という恐ろしい疑いを抱いているのですか。何を根拠にそのような考えを持ったのですか。私達がどんな国や時代に住んでいるとお思いですか。私達はイングランドの人間で、キリスト教徒だということを思い出してください。あなた自身の理解力、物事の妥当性に対する感覚、あなたの周りで起こっている事についてのあなた自身の観察に照らし合わせてみてください。」(199)

ヘンリィはキャサリンの度を越した幻想の持つ愚かさを指摘し彼女を恥じ入らせ、キャサリンも分別や良識を伴わない子供じみた幻想癖に別れを告げることになる。

3

それでは果たしてキャサリンは賢明な女主人公としての成長を遂げたのであろうか。オースティンがこの作品の書き出しで繰り返し強調しているように、キャサリンは小説の主人公にはなり得ないような平凡そのものの「世間一般の17歳の娘と同程度に無知」な存在として登場させられている。そこには明らかに当時の小説に対するオースティンのからかいが込められているが、と同時に単なる揶揄に終わらずオースティンなりの独自な女主人公像を生み出そうとする意欲も当然存在するはずである。キャサリンはファニー・バーニーの同年齢の女主人公エヴリーナ同様、無邪気で気取りがなく素朴な田舎娘である。そして生来の直観力と良識を備え、自ら無分別な行動に走ることは決してない。しかしキャサリンの無邪気な率直さはどの女主人公たちをも凌ぐように思われるのである。そしてそれは特にヘンリィとの関係において際立っていると言える。キャサリンはヘンリィとの出会いの時点から彼に対して並み並みならぬ関心を抱いている。美徳を体現したような慎ましやかなエヴリーナは、相手がどのように彼女のことを思っているのかも分からぬうちから一方的に相手に愛情を抱くことの軽率さを指摘され、必死になって自分の想いを押さえ付けようとする。ところがキャサリンは大層無邪気に感じたままを口にする。例えば、ジョンの偽りの情報にだまされてティルニー兄妹との散策の約束を破ったとき、キャサリンはひたすらヘンリィに誤解されることを恐れて弁解する。「ねえ、ミスター・ティルニー、私はどうしてもあなたにお話をしてお詫びを言いたかったの。あなたは私のことをとても無作法だと思ったことでしょうね…でも私のせいではないのです…私はあなた方と一緒のほうが千倍も良かったわ…私はミスター・ソープに馬車を止めるように必死でお願いしたの、あなた方を見かけてすぐ彼に言ったのよ…もし彼が馬車を止めてさえくれていたら、飛び降りてあなた方の後を追いかけていたわ。」(109) 若い女性が相手の男性から愛情を告白される前に恋をすることの無分別について述べているリチャードソンの『ランブラー』への掲載記事を引用しつつ、それをからかうようなオースティンの調子には明らかに当時の教訓調の小説からの脱却とともに、美徳を振りかざしたりしない等身大の普通の娘を描きたいというオースティンの意欲が感じられるのである。そしてキャサリンはリチャードソンの理想とする慎ましく受動的な淑女像を笑いとばすかのように、驚くべき率直さを発揮する娘として描かれている。

しかしキャサリンはまた途方もなく単純でもある。「義理の妹を迎える心積もりをした方がいいよ、エリナー、しかもおまえがきっと気に入るに違いない義理の妹をね！屈託がなく率直で、無邪気、純真で愛情が深くしかもその愛情は純粋で、いかなる見せかけもなく、ごまかしなど全く知らないような妹をね」(207) とは、ヘンリィが兄ティルニー大尉の結婚相手として浮上してきたイザベラへの皮肉として述べた言葉であるが、同時にキャサリンに対する彼の間接的賛美ともなっている。しかしそのような会話が目の前で行われていてもその真意が見抜けないのはキャサリンだけである。このような女主人公を指してハウエルズは、「大変魅力的なお馬鹿さん」('a very engaging goose') と言っているが、[11] 確かにオースティンの描くこの女主人公は無邪気さと無知とが絶妙なバランスを保ちながら、愚鈍な人物に堕することなく読者

の信頼を勝ち得る存在になっていると言える。

このような無邪気なキャサリンにオースティンはもう一つの役割を負わせている。それはキャサリンに成長する女主人公像といった教訓的意義付けを持たせる、これまた典型的パターンから解放している点である。キャサリンは全幅の信頼を寄せていた兄のジェイムズや親友のイザベラという彼女の判断の拠となっていた二人の「権威者」の元を脱すると、次にはこの二人以上に強力なヘンリィという「権威者」を迎え入れる。彼女のヘンリィへの信奉ぶりはイザベラに対する以上に盲目的である。「ヘンリィ・ティルニーが間違うはずがないと信ずることはキャサリンにとって全く造作も無いことだった。彼の態度には時々驚かされることはあっても、彼の考えは常に正しいはずであった、そして彼女に理解できないものはそれまでと同様ほとんど無条件に賛美するのであった」(128) とあるように、彼女の行動指針は自らの判断を基にするのではなく、ヘンリィによって与えられるのである。キャサリンは自分の的外れな幻想が生み出した愚行に恥じ入りながらも彼女が最も恐れているのは、ヘンリィにそれを知られることである。「ヘンリィの判断を疑うよりは、自分自身の判断を疑うほうがいつでももっとずっと簡単なこと」(212) と考えるキャサリンは、オースティンの作品の中でも桁外れに無邪気で盲目的な主人公である。確かにキャサリンはヘンリィの良識ある忠告でティルニー将軍に対して抱いていた妄想から覚醒する。しかしオースティンはキャサリンの覚醒に関して巧妙に限界を設けている。キャサリンは現実社会や人間性についてのそれまでの一元的で単純な見方を脱して、善悪や真実や虚偽がない混ぜになっている現実社会に対する認識を新たにする。しかしこの認識にはあくまでも限界が設定されている。

> ラドクリフ夫人の作品は全て魅力的ではあるが、そして彼女の追随者たちの作品も素晴らしいものではあるが、少なくともイングランド中部諸州でお目にかかれるような人間性は多分彼等の作品には登場してこなかった。アルプス山脈やピレネーの山々に関してはそこに登場する松林や悪徳同様、忠実なる描写がなされていると言えるかもしれない。そしてイタリアやスイス、南フランスはそれらの作品で描かれているように恐怖においても多様で豊富と言えるかもしれない。キャサリンは自国を越えて、他の国のことまで疑ってみるようなことはしなかった。また自国についても厳しく問い正されれば、北や西の端の地域も除外しただろう…アルプスやピレネーではどちらか一方にはっきり色分けされた人達がいるのだ。そこには天使のように欠点ひとつない人間とそれ以外はみんな悪魔の性質を持っている人々がいるのだ。だがイングランドではそうではない、ここの人々は心や気質において善と悪がその分量は違っても常に混ざりあっているのだ。(202)

これはオースティンのラドクリフの作品に対する考えの一端を示す個所ではあるが、それ以上にキャサリンの認識の程度をも示唆している。キャサリンの認識はあくまでもイングランド中部諸州という条件がつけられている。それではイタリアや南フランスはキャサリンにとってはどうなのであろうか。そこはやはり天使のようなエミリーや大悪党モントーニが今なお存在する国なのである。キャサリンは確かに子供じみた思い込みや幻想とは別れをつげ、分別と良識に基づいた判断と行動をとることへの自覚を口にするが、その後すぐに「今まで通り何であれヘンリィの言うことに従って自己改善をはかる」(202-03) という心の準備も同時に行われるのである。キャサリンの盲目的とも言える熱中癖は変わらないままである。彼女の古城や寺院

への関心はそのまま形を変えて、ヘンリィの住む牧師館に対する関心へと移行するだけである。「今や彼女の想像力には有力な縁故をもった牧師館の気取らない快適さほど魅力的な所はなかった。ちょっとフラトンに似て、しかもそれよりもっと素敵な所。フラトンには欠点があるが、ヘンリィの住むウッドストンには多分欠点など一つもありはしない」(212) と、相変わらずのキャサリンの姿がそこにある。

キャサリンにとってノーサンガー寺院からの突然の追放により体験する恐怖感は、ゴシック小説の恐怖とは全く性質を異にする実体を伴った恐怖感であったが、彼女にはティルニー将軍が態度を急変させた理由は謎のままである。それ以上にキャサリンの苦悶の原因はヘンリィとの別れであった。ここでオースティンはキャサリンに従来の女主人公たちとは全く異なる振舞いをさせている。つまりエヴリーナもエミリーも同じような状況下で、まさしく女性の最大の美徳とされる 'fortitude' を発揮する。ところがキャサリンの落胆ぶりは誰の目にも明らかなほどで、しかもそれを隠そうともせず、ぼんやりしていたかと思うとそわそわと落ち着きがない。娘の真の落胆の原因に気付かない母親が与える慰めや忠告が、一般的状況ではいくら正しいものだと分かっていても、17歳の娘にとってそのような良識がほとんど無力な場合があることをオースティンは十分承知している。オースティンの描くキャサリン像はあくまでも教訓的役割から解放された、等身大の女主人公としての姿である。

キャサリン同様、率直で実直なモーランド家の人々にとっても、キャサリンを突然追い出すような振舞いに及んだティルニー将軍は理解しがたい存在である。あれこれその理由を推測したあげく、「紳士としても親としても決して誉められたものでもなく、心ある振舞いでもない」(231) ティルニー将軍の行為は「奇妙な事件」であり、ティルニー将軍は「奇妙な人物」ということで片付けられてしまう。そしてキャサリンが彼の実体を知らされるのは、今回もまたヘンリィの説明と謝罪を通してである。そして実際的なフラトンの世界に呼応するかのように、ティルニー将軍も横暴で威圧的な大悪党モントーニのイメージから極めて自己中心的で怒りっぽい金銭欲にかられた単なる俗物へと縮小していく。

この作品の場面がフラトンからバース、ノーサンガー寺院へと展開され、そして再びフラトンへと戻ってきたとき、我々読者はこの作品の書き出しの、あの穏やかでゆったりとした世界に再び身を置いている事に気付く。ただ違っているのは、我々がキャサリンのあの的外れな想像力や思い込みによる大騒ぎに付き合っているうちに、その的外れを笑いながらも空想や想像力が人生を膨らませ、楽しくさせるパン種のような働きをしていたことに思いをいたさせられ、今度は逆に実際的で、ある種合理的で良識に富むフラトンの世界に、柔軟さや広がりの可能性に対する限界のようなものが存在することにふと気付かされることである。モーランド夫妻は堅実で実際的で良識に富んだ好人物として造型されている。しかし娘の落胆の原因をバースでの華やかな娯楽に染まり過ぎ、田舎の地味な生活に我慢できなくなったせいだと、これまた的外れな訓戒を与えようとするモーランド夫人の姿からは、良識の限界のようなものが描き出されているように思われるのである。オースティンは度はずれた想像力の駆使をからかいながら、また一方で良識のみでは現実世界の認識には不十分であることを提示しようとしているように思われる。

「キャサリンはきっと困ったうっかり屋さんの主婦になることでしょうね」(245) とモーランド夫人は予言する。そしてまたオースティンは主人公たちの行動を総括するような当時の小説の教訓的な締めくくりに対しても最後のからかいを忘れない。

…私自身は将軍の不当な干渉が二人の幸福にとって有害どころか、むしろお互いの認識を深め二人の愛情をさらに強めることによって、恐らく二人の幸福に寄与することになったと確信しているが、この作品の向かう方向が親の横暴を勧めることにあるのか、あるいはまた子の不従順に報いることにあるのかは、その決着は関係各位にお任せする。(247-48)

オースティンの面目躍如といった感があるが、常に物事を一面的ではなく、様々な角度から捉える平衡感覚に富んだオースティンにとって教訓的な総括で締めくくられるほど人生は単純ではありえないし、またオースティン自身の関心もそのような合い矛盾する要素が混然一体となっている世界を写し取ることに向けられていたと言えよう。

注

(1) Austen, Jane. *Northanger Abbey.* Penguine Books, 1978, P.42. 以下このテキストからの引用はページ数のみを記す。

(2) ジェイン・オースティンの姉カサンドラによれば『ノーサンガー寺院』の執筆は1798～9年で、『自負と偏見』や『分別と多感』より後ということになっているが、オースティンは長い時間をかけ作品に手を加えるのが常であったということを考慮に入れると、オースティンの場合は執筆順序というのは、余り大きな意味を持たないように思われる。またこの作品の前書きに1803年に書き終えられたという作者自らによる記載があり、1816年には出版の意図がありながらも結局実際に出版されたのは作者の死後であったということから、作者がこの作品に対して何らかの不満を抱いていたとも考えられるのである。前半のバースのエピソードと後半部分のノーサンガー寺院のエピソードとの繋がり方がやや唐突であったり、結末の部分がいささか端折り過ぎているというような感を与えることと関連があるように思われるのである。またこの作品は、他の作品に比べて何よりも少女期の習作の特徴であるバーレスク的要素が顕著であり、粗削りな表現が他の作品より多く見受けられる。従って『ノーサンガー寺院』は、『自負と偏見』や『分別と多感』といった作品よりも初期の作品の原形をかなり留めているものと思われる。

(3) Austen, Jane. *Pride and Prejudice.* Oxford University Press, 1980, P. 185

(4) Austen, Jane. *Emma.* Oxford University Press, 1981, P. 374

(5) Radcliffe, Ann. *The Mysteries of Udolpho.* Oxford University Press, 1981, P. 5

(6) Burney, Fanny. *Evelina.* Oxford University Press, 1982, P. 7. & P. 21

(7) Shorter, Clement ed. *The Brontës : Life and Letters,* Vol. 1, New York : Haskell House Publishers Ltd., 1908, P. 387. ジョージ・ルイス宛、1848年1月12日

(8) Gaskell, Elizabeth. *The Life of Charlotte Brontë.* Everyman's Library, London : J. M. Dent & Sons, 1974, P. 215

(9) Chapman, R. W. and Southam, B. C. ed. "Love and Friendship" in *The Works of Jane Austen* Vol. VI, Rev. ed. Oxford University Press, 1988, P. 85

(10) Butler, Marilyn. *Jane Austen and the War of Ideas,* Clarendon Press, 1976, PP. 173-74

(11) Southam, B. C. ed. *Jane Austen : Northanger Abbey and Persuation,* A Casebook Series, The Macmillan Press Ltd., 1976, P. 55